

平成26年度 鳥取県立農業大学校評価システムシート (H27.2.26)

評価基準 (達成度)

- A 100%以上達成
- B 80~99%達成
- C 60~79%達成
- D 40~59%達成
- E 39%以下の達成

重点目標	新規就農者の円滑な就農の支援 1個別経営計画作成のための個別指導強化 2農業法人等の求人情報収集と関係機関との連携による自営就農及び雇用就農の支援強化
------	---

課題番号	課題	現状	評価項目	具体的方策及び評価指標	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員会からのコメント
1	新規就農者の育成	<p>1 H25年度卒業生は、22名中、自営就農2名、雇用就農9、農業関連企業団体就職7、一般企業就職2、未定2。</p> <p>2 近年、法人や個人農家からの求人が増えており、学生の雇用就農割合(H21から25年度)も14、24、37、48、41%と増えている。</p> <p>3 在校生の実家は、専業農家18%、兼業21%、非農家61%。</p> <p>4 全体的に雇用就農の求人に対する学生の反応が遅い。</p> <p>5 自営の新規就農については、青年就農給付金や経営計画等に係る支援について個別の事情に沿って対応している。</p>	<p>1 求人・求職者情報の農業法人等との共有による雇用就農の促進</p> <p>2 自営新規就農希望者の就農計画作成支援など就農の促進</p>	<p>1 関係機関との情報共有を進め、雇用就農を促進する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・農業改良普及所等関係機関への雇用就農を希望する学生の情報提供 ・農業法人及び法人就農者訪問等による農業法人情報の収集 ・農業法人及び雇用予定農家との意見交換会の開催 ・進路(就農)意識の醸成のための1年次農家実習及び面談の複数回実施 <p>(評価指標)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生求職者数を上回る求人情報の収集 ・学生の就農率 50%以上 <p>2 自営新規就農希望者全員の就農計画作成を支援する。</p> <p>(評価指標) 青年等就農計画作成と認定</p>	<p>1 雇用就農関係</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各コースで適宜農業法人や普及所等から情報の収集 ・農業法人等との雇用就農情報交換会を開催(8/5、参加:農業者15、学生研修生15)。 →1件の内定につながった。 ・就農意識の醸成 →1年次農家実習4名(5農家) ・雇用就農(県内求人26件、県外9)の内定8名 <p>(評価指標)</p> <p>求人35件/求職学生15名 就農率65%(2/16現在)</p> <p>2 自営就農関係</p> <ul style="list-style-type: none"> ・予定者5名(果樹3、作物1、畜産1) <p>(評価指標)</p> <p>青年等就農計画 1名作成(普及所と調整中) 1名は実家の事業計画あり</p>	B	<p>1 積極的な情報提供と収集を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・雇用就農情報交換会の相談コーナーの時間確保と2回開催。 ・1年次農家実習参加学生の増。 <p>2</p> <ul style="list-style-type: none"> ・就農計画の早期作成指導 ・普及所等との就農予定者情報の早期共有による就農支援 	<p>・景気の回復による新規就農の相談数が減ってきているようだ。ここで踏ん張る必要がある。あらゆる方法を活用して、鳥取県に集まってきていただけるような活動を希望する。</p> <p>→雇用保険活用による研修や農家派遣研修の新規実施するとともに、雇用情報と併せてそれらを売り込んでいく。</p> <p>・町村で人材バンク的取組の動きや野菜農家でもたんだんと法人化の動きがあるので、連携をしたらいい。</p> <p>→是非連携していきたい。</p> <p>・1年次の農家研修:学生は農家の考えを実感するいい機会になった一方、受入れ農家にとっても農業を目指す若者の気持ちを知るいい機会になった。宿泊研修の受入れができればより農家の実情を実感できるのだが、受入れ側の負担というハードルがある。</p> <p>→来年は派遣学生を増やしたい。</p> <p>・将来の仕事を意識し始める小学生頃から、農業の話をしたり、体験をさせる機会を作してほしい。</p> <p>→機会を探し実施を検討する。</p>
2	学生の確保	<p>1 少子化等により高校の生徒数が減少し定員の確保が困難になっており、入学生数は平成23年度以降、定員割れが続いている。</p> <p>2 H22~26年度の入学者数は、33、26、26、25、23名。</p>	<p>1 学生募集活動</p> <p>2 農大情報のこまめな発信</p>	<p>1 オープンキャンパス(3回開催)、高校の教員を対象とした農大説明会の開催と高校訪問、高校生保護者へのPR(学生募集チラシ等の配布)を実施する。</p> <p>2 農大市等のイベント実施による一般県民の農大認知度アップを図る。</p> <p>3 農大の日々の様子をリアルタイムでホームページに発信する。</p> <p>4 各農業改良普及所への入学候補者の照会する。</p> <p>(評価指標) 学生入学者数 定員の30名以上</p>	<p>1 学校説明会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オープンキャンパス3回、教員説明会1回、農高生保護者への募集チラシを配布した。 <p>2 農大市等のイベント情報発信を新聞社、TV局等に対して行った。</p> <p>3 農大の様子を月単位でHPに掲載した。</p> <p>4 普及所への学生募集の呼びかけにとどまった。</p> <p>(評価指標)</p> <p>合格者23名(2/13現在)</p>	C	<p>1 農高連携による農高生、教員の農業体験実習の実施</p> <p>3 HPへの気軽な掲載意識の醸成が必要。</p> <p>4 普及所が持っている地域情報の積極的な利用。</p>	なし

課題番号	課題	現状	評価項目	具体的方策及び評価指標	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員会からのコメント
3	学生の営農技術向上	<p>共通（または総括）</p> <p>1 昨年度、全学生（43名）を対象に専攻実習に関する理解度や日々の生活態度等を自己評価するための「理解度アンケート」を実施した。この自己評価を踏まえて、職員の評価を記載し個別面談等で提示する事により互いの共通認識としている。今後も学生個々の状況に応じた個別指導に有効活用する必要がある。</p> <p>2 農大市等の販売実習を通して、栽培だけでなく経営や流通販売を体系的に学ぶ事ができる点が本校の特色である。対面販売を行う事で、消費者の反応をリアルに感じ、この事が学生のモチベーション向上に繋がるものであり、今後も継続して実施する必要がある。</p>	<p>1 学生個々の状況に応じた個別指導の充実</p> <p>2 販売実習による経営感覚の習得と学習意欲の向上</p>	<p>1 「理解度アンケート」を実施し、学生と職員の共通認識を図るとともに、特に学生の苦手分野を強化するための指標として活用する。 （評価指標） ・レベルアップ状況の個別評価確認（全学生44名対象）</p> <p>2 販売物のホッパの作成、陳列の工夫、試食、売場の装飾等、農大産農産物や農大をより多くの人に知ってもらうためのPR方法を学生が中心となって検討する。 （評価指標） ・農大市PRホッパ、チラシ作成及び掲示、配布（ホッパ：20枚/回*5回 チラシ：2000枚/回*5回） ・販売物のホッパ作成 ・包装方法、ラベル作成等、販売物PRの工夫 ・農大市来場者へのアンケート実施</p>	<p>1 各科で随時アンケートを実施している。</p> <p>2 【農大市開催】4回 ・ホッパ作成 20枚×4 ・チラシ作成 2000枚×4 ・ホッパ作成 各科で実施 ・商品紹介のソールを作成して包装袋に貼付ける等、PRの工夫を行った ・来場者アンケート2回実施 【校外販売実習】6回（出張農大市、わったいな、満菜館等） ・ホッパ作成 各科で実施 【修農祭】1回 ・開催PRホッパ、チラシ（新聞折込）の作成 ・商品用の看板、ホッパ作成を各科で実施</p>	B	<p>1 実施時期を早めて継続実施することにより、具体的な指導を効果的に行う。</p> <p>2 学生が主体性を持って立案行動できるよう、引き続き支援を行う。</p>	<p>1 農大の間に色々と挑戦させ、テーマを持って進める中で学生にとって得意なことを見つけさせてほしい。また、言われたことはするが、それをやる意味を理解していないと応用が利かない。その意味を学生に理解させて欲しい。 →大切なことであり、力を入れていきたい。</p> <p>2 生産物を売るということについて、どのような視点で商品を作り上げるか、商品自体の規格・荷姿・ラベル等、お客の心理・要望等を意識させることが大切。 →オープンカレッジなどでもデザイナーを講師に招くなど、販売についても勉強の機会を設けている。</p>
		<p>【果樹】</p> <p>2年間の限られた期間で、果樹の栽培管理に係る知識、技術の習得を図るためには、職員の指示待ちではなく、学生が主体となったほ場運営を図る必要がある。また、具体的な目標を掲げることにより、学習意欲を高め、更なるレベルアップを目指す必要がある。</p>	<p>1 ほ場管理に係る学生の主体的取り組み</p> <p>2 ナシ新品種を中心とした栽培技術の向上</p>	<p>1 各樹種の主査（2年）が、管理作業前に、目的や方法を説明することで、各学生の責任感と主体性の向上を図る。 また、二十世紀梨については、全学生の担当樹を決め、年間の管理作業を各自の責任で行わせる。 （評価指標） ・各主査（2年）による作業前説明の実施 ・栽培管理の実施と実績記録</p> <p>2 ナシコンクール（ナシ記念館主催）の入賞を目標とするとともに、新甘泉等のナシ新品種を題材としたプロジェクト学習に取り組みむ事により県主要品種の栽培技術の習得及び向上を図る。 （評価指標） ・コンクール入賞 ・ナシ新品種を題材としたプロジェクト学習の実施</p>	<p>1 各樹種の主査全員が作業の目的、方法を説明後、作業を開始した ・H27年1月以降は、2年から1年に引き継がれ、1年生が主体となり上記の説明等を行っている ・各学生が、日々の作業内容等を毎日日誌に記録した</p> <p>2 ・ナシコンクール（新甘泉の部）に出品したが、受賞は逃した ・ナシ新品種の新甘泉、爽甘等及びカキ新品種「輝太郎」を題材としたプロジェクト学習に取り組んだ（ナシ3名 甘1名） ・「爽甘」のプロジェクトに取り組んだ学生（就農予定）が、果樹普及員の調査研究発表会の場で発表を行った。担当普及員から、将来的な品種構成についての提案等をいただいた。</p>	B	<p>1 学生個々の能力差、やる気の差が明確に表れるため、個々のレベルに合わせた対応が必要</p> <p>2 基本的には今年度の取組を継承するが、生産現場で活用可能性の高い内容とし、公の場での発表の機会を増やす</p>	なし

課題 番号	課題	現状	評価項目	具体的方策及び評価指標	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と 改善策	外部評価委員会からの コメント
		<p>【野菜】 普通科高校出身や非農家の学生がコースの大半を占めており、農業に関する基礎技術及び知識の習得を進めている。</p> <p>一方で将来的な独立就農を目指す学生もあり、実習のレベルや規模を充実させることも重要である。</p> <p>さらに、六次産業化や有機栽培技術への関心も高いことから、多様なニーズに対応した実習を行う必要がある。</p>	<p>1 栽培基礎技術の向上とニーズに対応したプロジェクト研究の実施</p> <p>2 農業技術検定取得の促進</p> <p>3 環境保全型農業（特裁・有機）の理解と実践</p>	<p>1 1年生は露地栽培での少量多品目栽培および施設での共同管理を行い、栽培の基礎技術を習得させる。2年生はプロジェクト研究において、各自の興味や実情に合わせた課題設定を行い、主としてハウス1棟を1人で管理する。 （評価指標） ・栽培品目 露地5品目/人 施設1品目/人 ・就農を目指す学生は県特産品目の白ネギ、ブロッコリーを規模を拡大して栽培 ・トレーサビリティ（栽培管理履歴）記帳の実施</p> <p>2 農業知識の習得のため、農業技術検定の取得を行う。 （評価指標） 1年次終了までに3級、卒業までに2級の取得</p> <p>3 有機栽培実習と、鳥取県特別農産物の認証を受けた栽培を実施する。 （評価指標） 有機専用圃場における実習（15品目/年） 特裁認証（5品目）</p>	<p>1 1年生は露地栽培で5品目以上/人、施設栽培で1品目以上/人の目標を達成。 ・2年生は各自ハウス1棟を用いてプロジェクト研究を実施。プロジェクトの栽培品目はトマト、イチゴ、小玉スイカ、甘長トウガラシ、パプリカ及びブロッコリー。1名の学生は中国四国農大等プロジェクト研究発表会にて優秀賞を受賞し、全国大会へ出場。 ・すべての栽培品目においてトレーサビリティ記帳を実施した。 2 ・野菜専攻の1年生は全員（7名）が農業技術検定3級に合格し、その内1名が2級試験は2級試験にも合格。 ・野菜専攻の2年生6名中、5名が農業技術検定2級に合格。 3 ・有機専用圃場において23品目の野菜栽培実習を実施。 ・特裁認証はスイカ、パプリカ、甘長トウガラシ、トマト、ブロッコリーの5品目で取得。</p>	A	<p>1 多品目の野菜について、圃場作りや育苗から収穫後の片付けまで一貫した栽培を体験させる。</p> <p>2 加工及び販売法の検討も行う6次産業化を想定した学生指導。</p> <p>3 有機特裁関連の学習指導の継続</p>	<p>・農産物の販売に関し、商品説明資材や包材等の創意工夫を学生自ら行うよう指導をされてはどうか。</p> <p>・上記の販売においてはシールや包材等に掛かる経費や資材使用における費用対効果をよく認識させ、コスト感覚を身につける指導をお願いしたい。</p>
		<p>【花き】 基礎技術の習得を進めているが、実用化された新技術や本県に適する新品目を導入し、さらに栽培技術の向上を図る必要がある。また、新技術の経営的評価を行い、理解させる必要である。さらに、装飾、展示技術の教育は行われておらず、学生のニーズであるこれらの技術習得を図る必要がある。</p>	<p>1 省エネ型ハウスを始めとする新技術の導入</p> <p>2 新品目・品種の試作と評価</p> <p>3 装飾、展示技術の向上</p>	<p>1 省エネ技術として二重空気膜ハウスを導入し、技術的、経営的評価を行う。また、鳥取大学と県が共同で実施する植物のEOD反応を活用した技術について現地実証展示ほの1つとして参加し、技術組み立ての一翼を担う。 （評価指標） ・新技術の導入状況とその効果確認 ・県の花き部会等の現地視察を受け入れ、また、担当学生が説明する</p> <p>2 新品目等の試作と技術的、経営的評価を行う。 （評価指標）新規品目等の導入状況</p> <p>3 各種イベント、農大市等の販売実習で展示、並びに農大入学式、卒業式などでの玄関装飾などを積極的に行い、装飾展示技術の向上を図る。 （評価指標）装飾、展示の内容とその回数</p>	<p>1 二重空気膜ハウスの導入、EOD反応を活用した技術の現地実証に参加するなど、新技術の導入を積極的に行っている（新技術の導入：2技術、現地視察の受け入れ回数：0回）。 2 新品目等の試作として、露地でヒマワリを栽培、短期間で栽培可能であり、ハウスの空き時期でも可能か実証を行った（新規導入品目1品目）。 3 農大市等の販売実習では展示を行うとともに、農大市の開催時には玄関装飾も積極的に行っている（展示・装飾回数は3回）。 また、新たに「花育」活動として、初めて保育園での寄せ植え教室を実施。学生が先生役となり指導する経験をする中で、教え方、伝え方の勉強となった。</p>	B	<p>1 新技術等については、効果を検証すると共に、プロジェクト学習として取り組む。 2 装飾展示、「花育」活動については、継続して行い、花に親しむを環境づくりを行う。</p>	<p>・「花育」活動で学生が先生役となって指導する機会を設けることは、本人の勉強になるので今後も続けて頂きたい。</p> <p>・幼児期や小学校低学年の時期に、学生が教える機会を設けることは、農業を知る良い機会にもなるので、花に限らず、他のコースでも取り組んで欲しい。</p> <p>・フラワーアレンジメントや装飾など学生自身が行い、飾ってからの花の変化など見せる機会も作って欲しい。</p>

課題 番号	課題	現状	評価項目	具体的方策及び評価指標	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と 改善策	外部評価委員会からの コメント
		<p>【作物】 トラクター、田植機、コンバイン等の機械操作は未経験の学生がほとんどである。 有機栽培に漠然とした興味を持って入学する学生が多いが、具体的な栽培管理は未経験である。 法人就農を目指す学生も多く、水田農業の複合経営で取り入れられることが多い白ネギやブロッコリーの栽培技術の習得も必要である。</p>	<p>1 農業機械操作技術の習得 2 有機栽培の取り組み強化 3 白ネギ、ブロッコリーの栽培技術習得</p>	<p>1 農大の管理ほ場面積を増やすほか、近隣農家から機械作業実習ほ場の提供を受け、水田での作業面積を確保する。また、トラクターでの耕耘技術競技を実施し、技能向上を図る。 (評価指標) (1)トラクター、田植機、コンバインの作業量を前年並みに確保する 目標値：トラクター 150hr 田植機 300a コンバイン 58hr (2)耕耘技術競技の実施 2 有機栽培技術導入ほ場を増やす。 (評価指標)有機栽培技術導入ほ場 2ほ場→3ほ場 3 白ネギ(秋冬)、ブロッコリー(秋冬)を栽培する。 (評価指標)栽培面積の増加 目標値：白ネギ150㎡、ブロッコリー200㎡</p>	<p>1 農大の管理ほ場を2ほ場計37a増やしたほか、機械作業実習も積極的に実施した。また耕うん技術競技を実施した。 (実績) 作業量 トラクター183hr 田植機 480a コンバイン78.4hr 耕うん技術競技を実施 実施日8月19日、20日 2 有機栽培技術導入ほ場を増やした。 有機導入ほ場 2ほ場→3ほ場 3 白ネギ(秋冬)、ブロッコリーを栽培 栽培面積の増加 白ネギ150㎡ ブロッコリー380㎡</p>	A	今年度と同等の実習量を確保し、知識・技術の習得及び向上を図る。	なし
		<p>【畜産】 1 畜産業において、非農家出身学生が多数を占める状況では、卒業即自営畜産経営は難しいため、将来的自立も見据えながら畜産関連業種又は農業法人就農に大きく力を入れる。 2 畜産関連業種又は農業法人で求められる人材とは、家畜(牛)の基本的管理技術を習得した人材であり、本学の学生には、牛の取扱いに主眼をおいた飼養管理技術が求められている。</p>	<p>1 就農または農業法人への就職者数 2 各共進会への出品及び上位入賞</p>	<p>1 畜産関連業種又は農業法人、先進農家との積極交流(訪問、夏期研修等)による就職マッチングを行う。 (評価指標)畜産関連業種又は農業法人等就職者実数(自立就農者) 2 乳牛および和牛の共進会参加し、飼養管理技術の習熟(業界の求める人材育成)を図る。 (評価指標)共進会参加率及び優等賞率</p>	<p>1 (株)大阪市食肉市場、家畜改良事業団、先進酪農家3戸への訪問交流を行った。 1名は酪農ヘルパー組合に就職が決定している。1名は、親元での自営就農である。 2 中部酪農共進会、中部畜産共進会に乳牛及び和牛を1頭ずつ出品を行った。それぞれの共進会の出品の過程で調教技術をもつ県の専門家の指導を受けた。牛の調教については乳牛を2年生が和牛を1年生が担当した。その結果、牛をある程度まで誘導することができるようになったことは、本人達のレベルアップにつながった。</p>	B	<p>1 先進農業法人等への交流を継続する。 2 共進会出品技術の継続的向上。出品牛の選定と飼養管理技術の向上を図る。</p>	なし

課題番号	課題	現状	評価項目	具体的方策及び評価指標	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員会からのコメント
		<p>【農業機械】</p> <p>1 農業機械の仕組みと操作についての知識や安全意識の低い学生が見受けられる。</p> <p>2 農業法人等からも農業機械操作技術のレベルアップを求める意見がある。</p> <p>3 運転操作を誤り学校内で作業機を破損する学生も一部見受けられる。</p>	1 機械知識、操作の習熟度	<p>1 農業機械の知識・操作技術の習得と農作業安全の意識啓発を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講義、ビデオ視聴 ・大型特殊免許取得の運転操作練習 ・各専攻での実習を通じての作業機の運転操作 <p>(評価指標) 学生個別の習熟度評価&目標シートの作成と学生本人への提示</p>	<p>1 座学と実習を通じ、農業機械の運転・操作技術と農作業安全の知識向上に努めた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・刈払機の草刈り実習(5月)、トラクターと刈払機の簡易な点検、工具等使用法、農作業安全について学習(対象1年生、4月～2月:12回) <p>(実績)</p> <p>習熟度アンケート結果(操作がよくなる又はできると答えた学生の割合)</p> <p>【1年生】</p> <p>刈払機 32%、トラカ- 42%</p> <p>【2年生】</p> <p>刈払機 92%、トラカ- 92%</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年生のトラクターの運転練習(6月～10月) <p>(実績)</p> <p>大特免許取得 16名/希望者18名</p> <p>けん引免許取得 14名/希望者14名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各専攻毎に、専攻実習の中で各種作業機の運転操作を実践(4月～2月) 	C	<p>農作業の基本となる刈払機・トラクターの操作に特に不慣れな学生(1年生)に対し、各科と連携し、操作技術のレベルアップを図るための取り組みを行う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・機械操作については、実際に機械を使用することで危険認知の能力がついていく。 ・毎回の作業できちんと振り返りをしないと同じ失敗を繰り返すことになる。学生が作業後にヒヤリハット事例や改善点等を考える時間と力を付けてもらいたい。(報告、チェックというステップの習慣化ができればいい)
4	社会情勢に即応した実践教育の実施	<p>1 農業現場に即したプロジェクト活動(卒論)の課題設定と、実用技術を意識した取り組みを進めている。</p> <p>25年度の成果のうち実用性が高いと判断されたスイカの成績1件を普及員の調査研究活動発表の場で情報提供し、評価を受けた。これ以外にも参考資料としてナシの成績1件を普及所の求めに応じて情報提供した。</p> <p>2 1・2年とも講義の履修内容として地域貢献活動(ボランティア)を位置づけている。</p>	<p>1 実用性の高いプロジェクト成果の確保</p> <p>2 地域社会との関わりの促進</p>	<p>1 実用性を意識した課題設定と実施に努め、学生が就農後に活用でき、生産現場のニーズにも応えられる成果を確保する。</p> <p>(評価指標) 校内発表会以外の情報提供の場を3件以上確保する。</p> <p>2 引き続き地域貢献活動の情報を収集して学生に提示し、取り組みを促す。</p> <p>(評価指標) 学生による地域貢献活動(1人2回)の実施率率100%</p>	<p>1 下記の2件の発表があった。</p> <p>①ナシ新品種の栽培法に関する発表(果樹研究同協会・果樹特技普及員合同研究発表会)</p> <p>②実家の農業経営改善に関する発表(農村青年冬のつどい)。</p> <p>2 98%の学生が少なくとも1回の地域貢献活動を実施しており、80%の学生が2回実施した。</p>	C	<p>1 プロジェクトの計画や初期段階から成果を見越した指導を行う。</p> <p>2 一層の働きかけを行う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア活動を平日に行っている、学生の学習活動に支障は出ないのか。 →ほとんどが休日実施だが、代わりに専攻実習などで支障のない範囲で代休を取らせている。

課題番号	課題	現状	評価項目	具体的方策及び評価指標	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員会からのコメント
5	研修生の栽培技術・経営能力の向上と就農の円滑化	<p>1 研修生共通カリキュラム（現地視察研修、OB訪問研修、土壤肥料・病害虫・経営計画作成講義、機械・農産加工実習）の評価は、○以上が90%以上と高い。</p> <p>2 若い研修生の中には、就農に対する意識が低く、経営計画の作成が進まない場合もある。</p> <p>3 研修生の募集及び円滑な就農のためには関係機関との連携と情報の共有化が必要である。</p>	<p>1 評価アンケート</p> <p>2 農家派遣研修及び経営計画</p> <p>3 相談会</p> <p>4 就農率</p>	<p>1 研修科共通カリキュラムについて研修修了時の評価アンケート（4段階評価 ◎、○、△、×）を実施する。 （評価指標）○以上の評価 90%以上</p> <p>2 就農に対する意識づけのための農家派遣研修を実施するとともに、個別指導による経営計画の作成支援を行う。 （評価指標）農家派遣研修実施者 5名 経営計画完成者 80% ※対経営計画必要者（研修修了時）</p> <p>3 従来、募集チラシのみの配布であった「若者仕事プラザ」等で新たに相談会を実施する。 （評価指標）実施回数 2回</p> <p>4 研修修了後の就農率を高める。 （評価指標）就農率90%以上</p>	<p>1 7月及び10月閉講の11名の修了研修生に対する評価アンケート結果は、講義、実習、OB訪問研修とも評価が高く、全体として「○」以上が96%となった。 理解度については、実習58%講義57%、その他（先進農家研修等）60%であった。</p> <p>2 研修生OBの農家に3名の研修生を派遣し、就農に対する意識を高めた。 研修生3名の就農計画が認定され、1名については認定審査中。</p> <p>3 年度中に1回の開催を計画中。</p> <p>4 1月修了生までの就農率は90%（19名/21名）であった。</p>	C	<p>1 新しいアンケートでの評価基準の検討</p> <p>2 派遣研修希望、必要者の早期は握</p> <p>3 年2回の計画実施</p>	<p>・新規就農する場合、就農計画は現実が分かれば分かるほど書けない。研修中に計画の認定を受ける研修生の意識はどうか。どういう指導しているのか。就農計画の作成のポイントは何か。 →就農計画を作成する研修生は、研修中も青年就農給付金（準備型）を受け、研修修了後、すぐ就農し給付金（開始型）の受給を考えている目的意識を持った研修生。自分の就農のビジョンを持ち、積極的に就農地のデータや情報を集めることができる。就農計画の作成、円滑な就農のためには、関係機関（担い手育成機構、市町村、JA、普及所）との緊密な連携が必要。</p> <p>・土地利用型の稲作経営では、他の部門に比べ計画が作りにくくなっている。稲作専作ではなく、野菜等との複合経営が必要である。</p>